

# チェルノブイリ通信

2005年6月25日

No. 64

発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局

連絡先 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16(株)ウインドファーム内  
TEL・FAX 093-203-5282

E-mail jimmu@cher9.to

URL <http://www.cher9.to/>

郵便振込口座 01770-1-65328 チェルノブイリ支援運動・九州



いつも身近なところに、絵のような風景が広がるベラルーシ。  
静かな水面はそのまま鏡となり、いつしか時の流れを忘れてしまう。

\*エレナ医師にとっての検診活動の意味

\*お母さんになった

リュドミラ・ウクラインカさん

\*リュドミラ・チュプチュクとの再会

\*事務局の1日

三島さんの事務局日誌

\*チェルノブイリ・スタディーツアー  
2005年・夏にかける思い

\*学習会報告など

\*チェルノブイリ基礎知識

## 現地の医師たちの手で 甲状腺の検診ができるように

### エレナ医師にとっての検診活動の意味

現地の医師たちの手で、必要な検診ができるようになること。これがチェルノブイリ支援運動・九州が取り組む検診活動の重要なテーマだ。知恵を伝える、技術を広めることは、少しずつ、しかし確実に現地で実践されている。この2年間、甲状腺の検診を学び、技術を身につけつつあるエレナ医師に話を聞いた。



#### エレナ医師

プレスト州立内分泌診療所に勤務。2年前からチェルノブイリ支援運動・九州による甲状腺検診に参加し、日本の医師やアルツール医師からエコーによる診察や吸引穿刺の技術を学ぶ。このように現地の医師が検診技術を学ぶことは、現地の医師の手で適切な検診を行えるようにするという目標に近づいていくなかで、とても大きな意味を持つ。

「今回（2004年11月に行われたプレスト第4回検診）のチェルノブイリ支援運動・九州の検診活動に参加してどうだったか、感想等、少しインタビューさせてください。」

「私はこの2年間、みなさんと協力して、甲状腺の検診に取り組んでいます。汚染地帯からの患者さんだけでなく、非汚染地帯からの患者さんにも、支援ができていくことがよくわかりました。これは、医療設備などの物質的な面でも重要な意味を持ち、患者さんにとって大きな支えとなっているはず。また、ベラルーシの医療専門家の技術の向上という意味でも、とても大切な活動だと思います。」

「エレナさんも普段は、アルツール医師たちとともにプレスト州全体を回り、地方の学校や診療所で年間、約1万5000人を診ているのですか？」

「いいえ。私はプレスト州立内分泌診療所で毎日働いています。この病院では、プレスト市の患者さんだけではなく、プレスト州全体の患者さんの検診を行っています。その中にはチェルノブイリ原発事故関係の被爆者の方もいます。」

「エレナさんは、この病院に勤めて何年になりますか？」

「丁度2年間です。私は8年前に医科大学を卒業しました。その後、地方病院で内分泌の内科医として働き、ここ2年間はこの病院でエコーを使った診察や吸引穿刺による細胞診断の専門家として働いています。」

「エコーの専門的な技術は、この病院に来られてから勉強されたのですか？」



甲状腺の検診の現場で吸引穿刺を行うエレーナ医師

おかげで、ここ（プレスト州立内分泌診療所）では、これらの検診が上手く行われています。プレスト州では、細胞診はここ以外の病院ではできません。」

—今回、ピテフスクでの検診に参加されましたが、ピテフスクの医師達はプレストの医療技術に対して、非常に高い関心を持っていましたね。

「チェルノブイリ支援運動・九州の医療支援チームは、プレスト州立内分泌

「はい。ここへ来て研修を受けて、エコーを使った検診することになりました。エコーの研修は、アルツール医師から受けました。」

—アルツール医師など、チェルノブイリ支援運動・九州の医療検診に参加している医師の検診の技術のレベルについては、どのような印象を持っていますか？

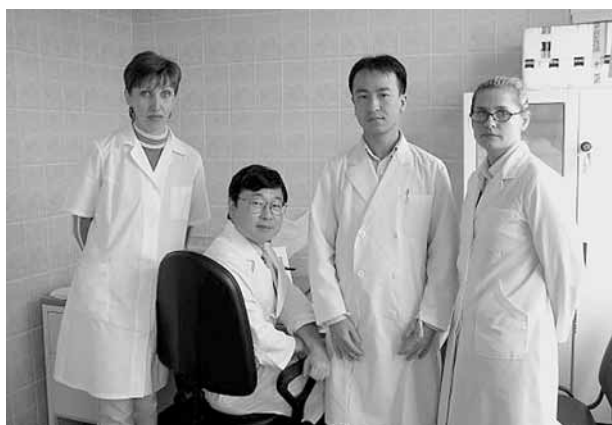
「アルツール医師達は、毎日の移動検診で何度もエコーを使った検診や細胞診をしています。アルツール医師の

診療所に対して、とても大きい支援を行っていると思います。アルツール医師が日本の医療専門家から学び、プレストの病院に導入することができた細胞診の技術システムは、特に大きな注目を集めています。もちろんピテフスクの専門家にとっては、この細胞診という診断方法は新しい経験でした。」

—エレーナさんは、今後この病院で、医師としてどういうことを学んだり、やっていきたいですか？

「私は全体をコンスタントに知りたいですね。エコーを使った検診が大好きなので、これをもっと深く勉強できたら嬉しいです。そして、日本の医師のように吸引穿刺による細胞診とエコーを使った検診ができるようになります。」

私の専門は内分泌ですが、内分泌の医者として働きながら、日本の医師やアルツール医師の指導により吸引穿刺ある程度できるようになってきました。足りないと思うのは細胞学の知識です。今後もしっかり細胞学を勉強できたらいいと思います。」



検診を終えて日本の専門家たちと記念撮影、左端がエレーナ医師

## チェルノブイリ支援・有機栽培水出し珈琲パック 森のしずく..... 940yen

「森のしずく」のベースになっているメキシコの有機栽培コーヒーは、樹木や果樹とともに栽培する森林農業により育まれています。ブラジルで最上級の評価を得ているジャカラランダ農場の有機栽培コーヒーをブレンドし、豊かな森と大地で育まれたマイルドな風味に仕上げました。水だしコーヒーならではのソフトな味わいをお楽しみください。



1リットルの水に2パック入れて約8時間



冷蔵庫で冷やしてアイスコーヒー



温めてホットコーヒーに

作文集「私たちの涙で雪だるまが溶けた」の作者

## リュドミラ・チュプチュクとの再会

# そのつながりが、これからも続いていくことを願う

文／寺嶋 悠(支援運動・九州運営委員)



前回の検診団派遣では、懐かしい人との思わぬ再会があった。作文集『わたしたちの涙で雪だるまが溶けた～子どもたちの中のチェルノブイリ』の中に収められている一編の作文を書いた子どもの一人である、リュドミラ・チュプチュクと、数年ぶりに会うことができたのだ。

作文集が1996年に発行されてから、今年で10年になった。すでに読まれたことのある方も多いかと思うが、その作文の作者の一人であるチュプチュクについて紹介したい。

### ■チュプチュクと作文集

リュドミラ・チュプチュクの出身は、ベラルーシ南部にあるゴメリ州の南端にあるグルシニコビツ村。3方をウクライナ共和国に囲まれた人口3000人ほどの村だ。

ベラルーシで「私の中のチェルノブイリ」というテーマで作文が募集されたとき、彼女はチェルノブイリの悲しみと、美しいふるさとへの思いをつづり、「わたしは生きる」とタイトルを付けて応募した。その作文を含む50編は作文集「私たちの涙で雪だるまが溶けた」に収められ、その出版に際して、チェルノブイリ支援運動・九州はリュドミラ・チュプチュクをはじめ作文の作者4人を日本へ招き、各地で報告会と交流会を開いた。私がチュプチュクに初めて会ったのもこの時だ。

その後「今度はぜひ私たちが現地へ行きたい」という日本の若者の声が届き、第1回チェルノブイリ・スタディツアーが企画された。そのツアーに参加したとき、私はまだ18歳だった。

全9日間の日程ではチュプチュクの住むグルシニコビツ村も訪問し

た。村でのホームステイは忘れられない思い出となった。また、チュプチュクが大好きな場所だと作文に書いていたジモビツシチェの森は、白樺やカシ、松のこずえの間からやさしく光が差し込む、天国のような場所だった。草花やコケモモ、キノコに包まれた豊かな森を、チュプチュクと共に歩いた。「私にとっては始まりの始まり」と書いたチュプチュクの故郷の光景と、チェルノブイリがベラルーシ全土に残した傷跡とが対照的で、なぜこの人たちが悲しみと苦しみを受けなければならぬのかという問いが、心に繰り返し浮かんだ。

### ■チュプチュクとの再会

あれから9年が過ぎ、チュプチュクは23歳の女性へと成長していた。支援運動の活動を現地で支えてくれているリュドミラ・ウクラインカの計らいで、私たちの滞在中にチュプチュクに会えるよう連絡を取ってくれ、私たちは短い時間だったが、昼食を一緒に食べながらいろいろな話をすることができた。

チュプチュクの鈴のように澄んだ声と、チャーミングな笑顔は昔と少しも変わらない。現在ミンスク教育大



1996年、グルシュコピッチ村での記念撮影

響を与えた人もいた。参加者最年少で当時中学2年生だった英生くんは、ツアー参加も「支援運動の会員だった親が知らないうちに決めた」と話していたほど、無口でもの静かな少年だった。彼はその後医学部に進学し、現在医師を目指して勉強中。支援運動のイベントにもよくボランティアで手伝いにきてくれる。また、当時から3で受験生だったにも関わらず思い切って参加した下関の自由理ちゃん、その後看護婦になり北海道で働いていると聞く。

私が『雪だるま』の作文集は今でも日本で読まれていて、時々事務局に感想が届いたりしているよ」と話すと、「ラード、オーチンラード（うれしいわ、とっ

てもうれしい）」ととても喜んでくれた。今は大学が忙しく、村へは時々しか帰れない。でも間もなく1週間ほど帰省する予定で楽しみにしていると話していた。

「今度またグルシュコピッチに来ることがある？」と尋ねられ、すぐに返事することができなかった。グルシュコピッチはベラルーシの最南端。「必ず行く」と

簡単に約束できる距離ではないが、スタディツアーなどの形で訪問できることもあるかもしれない。「今は分からないけど、きっといつか」と答え、名残りを惜しみながら別れを告げた。

ミンスク経由でいよいよ帰国するとい

う滞在最終日。チュプチュクは再び私たちのホテルを訪ねてくれた。「これを渡そうと思つて持ってきたの」と彼女が袋から取り出したのは、グルシュコピッチ村の民族衣装だった。赤、青、黄色、白色あざやかな衣装には、細かな刺繍が丁寧なほどこざれている。村の女性が祭りの時に着る、シルクのブラウスと刺繍入りベスト、スカートのセットだった。

「日本での私たちの活動紹介などの際に使う、ベラルーシの民族衣装を買いたいどこかに売っていないだろうか」と私が話していたこと、チュプチュクは覚えていて、グルシュコピッチからわざわざ取り寄せてくれたのだった。

聞けば、実家に連絡をして、村のおばあさんがバスに乗って、乗り継ぎ場所別のバスの運転手に預け、それをリュードが受け取って…と、民族衣装は遠い旅をしてきたよう。気を使わせたなあという思いとともに、今も変わらないチュプチュクのおもいやりに心を打たれた。

チュプチュク、また会おう。直接会うことは難しくても、これからもやりとりを続けていこう。チュプチュクからのお土産と感謝の思いを抱え、私たちは帰途についた。支援運動が結んだチュプチュクとのつながりが、これからも続いていくことを願いながら。

学4年生で、ロシア文学やベラルーシ文学を専攻している。以前会った時も、医者か国語の先生になりたいと話していたが、その夢を叶えるために頑張っているのだ。大学では教育実習もあり、学年が上がるごとに実習の時間が増え、4年生のチュプチュクもミンスク市内の中学で教えている。

今年6月に卒業したら、正式に勤務先の学校が決まる予定で、たぶん自分の出身のゴメリ州に配属されると思うと嬉しそうに話していた。

96年にグルシュコピッチを尋ねた人たちは、このツアーがその後の人生に影響

## 医療支援の現場と故郷の森を訪ねる旅

チェルノバイリ・スタディーツアー 2005年夏

◆ 日 程 ◆			
8/8 (月)	成田ーモスクワーミンスク	8/13 (土)	グルシュコピッチ村へ
8/9 (火)	午後：ベラルーシ赤十字、大使館訪問	8/14 (日)	午前：交流 午後：ゴメリへ
8/10 (水)	午前：医薬品会社との打ち合わせ 午後：1番病院、10番病院訪問	8/15 (月)	のぞみ21訪問、ナターシャさんと打ち合わせ
8/11 (木)	午前：チュプチュクと打ち合わせ 午後：ブレストへ	8/16 (火)	午前：ミンスクへ 午後：コンフィデンスと打ち合わせ
8/12 (金)	午前：ブレスト州立内分秘診療所訪問 午後：要塞見学	8/17 (水)	ミンスクーモスクワ
		8/18 (木)	成田着

# 子どもたちとの学びのなかで

## 再び導かれるベラルーシへの旅



小山 浩一（おやまこういち）

2002年より日田郡中津江村立中津江小学校勤務。平和・人権・環境などの学習を通して「命」について考える取り組みを実践。障がいを持つ友人との交流、福岡県筑穂町の産廃処分場見学、チェルノブイリ原発の学習をはじめ、夏休みのキャンプを原爆の火が燃え続けている福岡県星野村で行い、また秋の修学旅行では、長崎での原爆学習とともに水俣での水俣病学習を実施した。

### チェルノブイリ・スタディーツアー 2005年・夏にかけける想い

昨年のベラルーシ・スタディーツアーに参加し、ベラルーシの現状の一端に触れただけでなく、チェルノブイリ支援運動・九州の支援の実際の様子にも触れることができ、大きな感銘をもつて帰国してから人生が大きく動き始めました。

日田市・福岡市・佐賀市でのベラルーシ報告会等様々な場で、自分の見えてきたことを多くの人に語ってきました。関心を向けてくれる人も自分のまわりに増えてきました。現在の勤務校日田市立中津江小学校の子どもたちにも、支援運動・九州事務局の三人を招いての学習会を含め、ベラルーシとの交流を視野に入れた取り組みを進めてきました。

リュドミラ・ウクラインカさんからの2回に渡るビデオレターの紹介もし、彼女の結婚式の写真も子どもたちに見てもらいました。

平和や環境を中心に「命」の学習を進めている中津江小の子どもたちもチェルノブイリの現実と、苦しさといったかしながら生きる人々の生き方を伝えたい、できることならベラルーシの人々、とりわけ学校に通う子どもたちと交流することができたらどんなにすばらしいだろう、そんな思いから、再

び今年のスタディーツアーに行くことにしました。

昨年のスタディーツアーでは人生が変わるほどの大きな収穫を得ることはできませんでした。例えば、残念な気持ちも多々ありました。例えば、大好きな映画「アレクセイと泉」で老人たちがほろ酔い加減で歌い踊っていたあの民族音楽に接することが一度もありませんでした。学校で音楽を学級づくりの核にしている自分としては、音楽的なベラルーシ体験を持てなかつたことは大きな心残りでした。

それ以上に残念だったことは、学校や先生たち子どもたちと接することができなかつたことです。唯一、通信61号の表紙の木の上の子どもたちを写真に撮つたくらいです。ベラルーシの先生たちはチェルノブイリについてどんな授業をしているだろう、子どもたちはチェルノブイリについてどのくらい知っているのだろう。日本のことは知っているだろうか。日本のこと、たとえば水俣病のことは知っているのかな。ベラルーシの学校で歌っている歌を教えてほしい。中津江小で教えているたぐさんの歌、平和や命の歌を教えたい。そんな思いも募ってきました。

そんな時、秋の検診団で運営委員の



昨年のツアーにも参加した小山さん

寺嶋悠さんが、ベラルーシの子どものための作文集「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」で「私は生きる」という作文を書いたリウドミラ・チュプチュクさんと再会したという報告を聞きました。彼女はこれからミンスクの学校で先生になることになっています。彼女を通して学校の交流がしたい、また日本のことも伝えたい。今回のスタディーツアーには、医療支援というテーマに加えて、そんな願いも企画に含まれています。

ベラルーシと共に、現在、夢中になっているのが水俣です。昨年、6年生7人を連れて修学旅行に行き出会う

た胎児性水俣病の患者さんたちが働く喫茶店「ほっとはうす」へ何度も通っています。そこにはのぞみ21の品物も置いてもらっています。秋には「ほっとはうす」の人たちを中津江小に招くことにしています。水俣とチェルノブイリを結び、地球を守る大きな輪をつくりたいそんな願いが広がります。

中津江小の子どもたちと取り組んでいるたくさんさんの活動や歌などをおみやげに、チュプチュクさんに会いに行き、彼女からベラルーシのことをたくさん学び、日本の子どもたちに伝えたいと思っています。来年20年目を迎えるチェルノブイリ事故。そして公式確認から50年を迎える水俣病。これからの世界を担う子どもたちにこそ伝えるのが自分の使命だと考えています。

のぞみ21のステパンさん、ナターシャさんのご自宅で昨年お会いし、その後みんなの願いも空しく帰らぬ人となったニーナさん。ステパンさん、ナターシャさんに心からのお悔やみを伝えること、そしてお母さんになったリウドミラ・ウクラインカさんにお祝いの気持ちを伝えることも大きな目的です。

## 事故からもうすぐ20年 忘れちゃならないチェルノブイリ基礎知識

### 第1回【チェルノブイリ原発事故の概要】

1986年4月26日午前1時23分、チェルノブイリ原発4号炉は、試験中に突如暴走を始め、わずか2～3秒の間に二度の巨大な爆発が起きた。最初の爆発で一瞬のうちに原子炉が破壊された。さらに爆発に続いて火災が発生した。火災を消火するために、ヘリコプターから原子炉の炉心めがけて、総計5千トンにおよぶ砂や鉛などが投下された。火災は10日後の5月6日にようやくおさまった。この原発事故により、原子炉内に大量に蓄積されていた放射能が放出された。

チェルノブイリ原発事故により放出された放射能の量は広島原爆の600倍から800倍ともいわれ、アフリカ大陸以外の世界全域に拡がった。放射能は大地や水、空気を汚染し、そこで暮らす生物すべてが汚染された。チェルノブイリから約8千キロ離れた日本でも、野菜、水、母乳などから放射能が検出されたほどである。事故の起きたチェルノブイリ周辺では、ロシア、ウクライナ、ベラルーシの三国の約600万人の人々が放射能に汚染された地域での生活を余儀なくされた。また、約40万人が事故による汚染によって自分の家に住めなくなった。このように、チェルノブイリ原発事故は多大な被害をもたらし、人びとの暮らしそのものも破壊されてしまった。



チェルノブイリ原発

【文責／三島さとこ  
チェルノブイリ支援運動九州・事務局】

チェルノブイリの子どもたちの作文集

子どもたちのチェルノブイリ  
わたしたちの涙で雪だるまが溶けた



チェルノブイリの被害を受けた子どもたちによる歴史的な証言の記録。迫りくる死の恐怖のなかで描かれる友や家族との別離、生への渴望、愛してやまない故郷の森。今なお続くチェルノブイリの過酷な現実を知るための必読の書。

定価 ¥1,300 送料 ¥140

チェルノブイリへのスタディーツアー報告集

ベラルーシの旅



作文集「わたしたちの涙で雪だるまが溶けた」の発行後、若い世代を中心に多くの人から「チェルノブイリの現地を訪れたい」という要望が寄せられ実現したチェルノブイリへのスタディーツアー。その報告集として作成されたこの本には、ツアー参加者それぞれの視点から描かれたツアー体験記が収録。実際にベラルーシの大地を歩いて描かれた等身大のチェルノブイリ像がそこにある。

定価 ¥500 送料 ¥140

チェルノブイリ支援運動・九州 10年史

チェルノブイリとともに…  
10年のあゆみ



1990年6月の結成から10年。それを機にチェルノブイリ支援運動・九州の歴史を整理し、その記録をまとめた「10年のあゆみ」。チェルノブイリからの衝撃的な情報が次々と送られてくるなか、様々な想いを秘めて出発した第一次調査団の派遣から、支援運動の土台が作られてから今日に至るまでの軌跡が描かれている。その他、日本、世界の動きを同時系列で見られる10年分の活動記録。チェルノブイリの子どもたちの絵画。会員の皆様からの声など収録。

定価 ¥1,050 送料 ¥140



# 第4回 ベラルーシについて学んでみよう

チエルノブイリ支援運動・九州 運営委員・ロシア語通訳

山口 英文

「歴史は命の母である。」という言葉があるらしいです。私は、この言葉をお聞きしたことがありません。私に、この言葉をお聞きしたことがありません。

が早い反面、残忍なアンバランスな性格を

「歴史は命の母である。」という言葉があるらしいです。私は、この言葉をお聞きしたことがありません。私に、この言葉をお聞きしたことがありません。

恐ろしい政治の二期に分けられると言います。彼は1556年に貴族に軍役奉仕の義務を打ち出し、これによりツァーリに奉仕することで領地が保証され、世襲制の貴族とは異なる勤務貴族という階層が生まれ、中央集権的封建国家が生まれたのです。

## イワン雷帝の物語

イワン雷帝は1547年に初めて「全ロシアに君臨する皇帝」、ツァーリ（皇帝）として即位しました。彼は父ヴァシーリー3世を3歳の時に失い、大貴族達の陰謀を見ながら育った為か感受性が高く頭脳の回転

1564年にイワン雷帝は突如、退位を表明してモスクワから90キロほど離れた農村にこもりました。そして世襲貴族と聖職者を強く非難すると同時に民衆には何ら不満も無いと述べたのです。イワン雷帝を信頼していた貴族と民衆は懇願して彼を引き戻します。彼は直轄地と

死刑を含む刑罰権を認めさせて復位しました。しかしイワン雷帝の風貌がひどく変わり立派な鬚がなくなり目が虚ろな状態になっていた事に皆が驚きました。彼は、直轄地に親衛隊を組織し秘密警察のように使つて反対勢力や疑いのある人々を徹底的に弾圧・粛清し、信仰の対象であるモスクワ府主教がいさめた事にも激怒して殺害します。栄えていた商業都市ノヴゴロドは内部テロで焼き払われ、多くの農民が安全と有利な条件を求めて修道院や世襲貴族の領地に逃げ込みます。結果的には国土が疲弊しました。たまりかねた雷帝は親衛隊を廃止し、同時に農民の自由な移住を制限する制度を作り出して後のロシア農奴制の始まりを作りました。それまでは、ロシアの農民はユーリーの日という聖人の11月の記念日の前後2週間に勝手に好きな領土の土地や、未開拓の土地に移住してよかったです。

このような混乱に乗じてクリミア・ハン国の軍勢がモスクワまで侵入して10万人とも言われるロシア人を奴隷として連行します。さらに疫病と飢饉がロシアを襲い、イワン雷帝も様座な葛藤で半ば狂うようにして1584年に病死しますが、ここで彼がスポンサーとして取り組んだシベリア遠征のことに触れたいと思います。現在も油田で名高いチュメニが1586年に開かれ、最終的には1680年ごろには樺太を望む間宮海峡までのオホーツク海岸までロシアの支配が及ぶようになったのです。これらの毛皮を主とする物産はヨーロッパにもたらされ、広大な土地の農業生産、アジアとの通商路としての水運・陸路交通と併せてロシアを富める東の大国として育てる原動力となりました。

ロシアが海を求めて常に拡張したいというのはこの歴史が背景にあるようです。彼等は侵略というよりは内陸から様々な要因を持って海の出口を求めようとして西へ東へ南へと進みます。寒さもあるのか北上はあまりしません。これが好戦的な侵略国として取られる事があるのかも知れませんが、決して軍事的進出が目的ではなかったのですが、その過程で極めてドライな政治政策等が行なわれ、周辺諸国の不信と不快を買っているようです。このイワン雷帝に代表される様な政治手段は旧ソ連時代も見受けられ、現在もロシア政権では見受けられます。

チエルノブイリ支援運動の友人であるベラルーシの人々の祖先は当時モスクワ・ロシアの南西部の地方として西部からポーランド、北からはリトアニアとスウェーデン王国、南からはクリミア・ハン国の軍勢が侵入する十字路のような位置にありました。軍事・政治勢力の中核になうモスクワ・ロシアの人々とは違った立場で恐れ慄きながら異教徒の軍隊の蹂躪と解放の体験を負いながらモスクワ・ロシアの一部として生きていたのです。

# 新たな世代に向ける想い

## ——チェルノブイリに関わる3通の近況報告に寄せて

文／矢野宏和（チェルノブイリ支援運動・九州代表）

こんにちは。チェルノブイリ支援運動・九州の矢野宏和です。きょうは、チェルノブイリ支援運動・九州に寄せられた幾つかの近況報告を紹介させて頂きます。

まず、今年2月に娘ニーナさんを胃ガンで亡くされたナターシャからの近況報告では、母を失った孫のナターリヤが現在、ナターシャさんたちと一緒に暮らしている様子が伝えられています。ナターリヤは現在4歳。今年から幼稚園に通い始めるのですが、ナターシャさん自身も経済的な余裕もなく、まわりからのサポートを必要としているようです。甲状腺ガンで息子オレグを、そして今回娘ニーナを失ったナターシャさんたち家族と、これからも身近な仲間としてつながっていきたいと思います。

つながりと言えば、新しい生命が誕生したとの報告が、皆さんお馴染みのリュドミラ・ウクラインカさんから届けられました。リュドミラ・ウクラインカさんもまたチェルノブイリ原発事故の被害を受けた一人。16歳の時に甲状腺の半分を摘出されています。

ホルモン剤で成長に必要なホルモンのバランスを取りながらの出産は大変だったと思います。それは出産後においても同様で、リュドミラ・ウクラインカさん自身と、そして生まれたばかりの子どもが安心して成長していけるよう見守っていければと思います。

人の記憶というのは頼りないもので、当時あれほど世間を騒がせたチェルノブイリ原発事故も、19年の月日が過ぎてしまえば数ある悲惨な事件のひとつになってしまいます。しかし、大気や土壌に放出された放射能は、薄れゆく人の記憶とは関係なく、その被害をベラルーシの大地やそこに生きる人々に確実に刻印し、その苦境は次の世代へと引き継がれていきます。

今回、チェルノブイリ支援運動・九州の事務局で研修を受けた八波さんは、事故当時、まだ2歳だったといっています。原発事故当時のあのリアルな恐怖感を知らない世代でも、事務局の仕事を通して、チェルノブイリやベラルーシのことを自分の問題として考えてくれることは、私にとっても大きな喜びでした。

こうした若い世代の感性や新たな生命の誕生に触れると、自ずと次の世代の人々のことに想いがめぐってしまいますものですね。次世代に、安心して生活できる環境を残すこと。今回寄せられた3通の近況報告を読んで、その責務を改めて思い返したところです。

### 工房「のぞみ21」ナターシャさんからの近況報告 孫のナターリヤと一緒に暮らしています

こんにちは皆さん！

私たちの家族と工房で働く皆から、「チェルノブイリ支援運動・九州」の皆さんにご挨拶と、私たちの近況をお伝えするためこの手紙を書きました。

あと2週間で、夏休みに入ります。今ちょうど、季節の変わり目でもあり、作品はたくさん作りましたが、それを購入する人はあまりありません。私たちは、大変に疲れました。8月1日からあなた方が注文した二つの作品を準備します。

多分、あなた方に気に入られる作品だと思っています。それは、麻製の婦人用ブラウスと子供服です。支援運動・九州の皆さんが集められた工房を運営するお金で、賃貸料と工房で働く皆の賃金を払うことができました。

いま、私たちの所には多くの作品があります。—テーブルクロス、なべつかみ、手袋、マトリョーシカなどなど、私たちは作品の製作に当たって最善をつくしました！

8月にどんなものをいくら購入したいのかを連絡して下さい。

私の娘、ニーナが2月に亡くなった後、遺された孫のナターリヤは今私たちの所に住んでいます！その事は、いろいろ問題があっても私たちにとって大きな慰めです。幼稚園入園の手続きは8月にします。国は彼女に対して僅かな援助しかしてくれず、果物を買えば、後は残りません。今われわれだけでなくみんな生活は大変です。ナターリヤはもう、われわれと一緒に暮らすことに慣れました。でも、母親のことを大変、恋しがっています。母親のことについては触れないようにしています。この事は時間が解決してくれると思います。

以上が、私たちの近況です。

ナターシャ・ステパン そして ナターリヤ



ナターシャさんと孫のナターリヤ

# リュドミラ・ウクラインカさんがおかあさんになりました



親愛なる友人の皆さんこんにちは。  
長い間、手紙（メール）を書かなくてごめんなさい。  
それは私たちの赤ちゃんのためでした。  
3月6日、女の子がうまれました！  
これは私たちにとって、とてもしあわせな出来事です。  
いま、彼女の状態はとても良く、健康です。  
私たちは彼女をアンナと呼んでいます。  
私たちの心配をしてくれて、本当にありがとうございます。  
8月には皆さんが飛行機でベラルーシに来ると話しました。そのときに皆さんに会えるのを願っています。  
これから、私はたくさん家にいます。  
だから、何か必要なことがあれば私に頼んでください。  
ベストをつくします。

あなたたちのリュドミラ・ウクラインカより



## チェルノブイリ支援運動・九州の事務局の仕事を通して学んだこと 日々の地道な仕事を支える支援活動

文／八波 麻衣（福岡教育大学3年生）



こんにちは。チェルノブイリ支援運動・九州の事務局に研修生としてお世話になっています。去年この事務局に来ていた阿部千種先輩と同じ福岡教育大学・国際共生教育コース3年に所属しています。

私は今までボランティアとしてイベントに参加したりはしていたのですが、実習期間である今、生のNGOの活動に触れたいと思っていました。割と軽い気持ちで受け入れをお願いしたわけですが、チェルノブイリ原発事故、そしてベラルーシの現状を知ることによって気持ちにいろいろな変化が起こっていきました。

チェルノブイリ原発事故は1986年に発生しました。私が2歳の時のことです。私はもちろん事故当時の状況は覚えていません。小学生の時にテレビの特集番組を見てこのような事故が起こっていたのかと知った程度です。その番組では廃墟ようになってしまった街や有刺鉄線、

人々の暗い表情ばかりが映っていたように思います。

当然私はここに来るまでそのイメージを抱いたままだったわけですが、ここでの実習を通じて、凄惨なチェルノブイリ原発事故とベラルーシというイメージがガラリと変わりました。ベラルーシは自然がほんとうに豊かで生に満ち溢れている国なのです。人々は森でキノコを採ったり、家で家畜を飼ったり、野菜を育てたり。人々は自然と寄り添って暮らしていることが分かりました。風景もまるで美術館で見る油絵のように美しいのです。しかし、そんな美しい風景のなかに、目にも見えない、味にもおもしろくない放射能の脅威が潜んでいるのです。

何の罪もないベラルーシの人々がどうして放射能の被害を一番受けなければならないんだろう、なんて理不尽なんだろう。廃墟のイメージを持っていたときよりもこのような風景や人々の暮らしを知ることによって逆にそう思い、より悲しくなりました。しかし同時に、ベラルーシの人々がこのような状況下でも懸命に生きている姿に勇気付けられもしました。

事務局での仕事を通して、NGOの日常の業務は本当に地道なものであるなと感じました。メールのやり取り（日本語・ロシア語・英語）をしたり、資料を作成したり、原稿を書いたり。そして事務局は限られた活動資金の中で工夫して頑張っています。（突然ピー!!と鳴り出すパソコンも大事に使っています）。このような活動が支援運動を支えているのだと知りました。ここでの経験は私にとってほんとうに良いものになっていくと思います。この経験を糧にこれからの学生生活を頑張っていきたいです。

# 人々の記憶から消えてもなお残る チェルノブイリ原発事故の被害

文／三島さとこ（事務局スタッフ）



事務局スタッフの三島さとこさん

私は2004年の4月からチェルノブイリ支援運動・九州の事務局でアルバイトを始めた。そして今年の3月、大学を卒業して、事務局の専属スタッフとなった。

なぜチェルノブイリ支援運動・九州でアルバイトをしようと思ったかという、私は大学で国際協力やODA（政府開発援助）について勉強していたので、NGOの活動というものに興味があったからである。特にチェルノブイリにこだわっていたわけではない。アルバイトを始める前からチェルノブイリ支援運動・九州の名前は知っていたものの、恥ずかしながら、事務局でアルバイトを始めるまで、私にとつて

「チェルノブイリ」は学校の歴史の授業で習ったものにすぎず、チェルノブイリ原発事故はすでに過去に起きた悲惨な出来事として捉えられていた。私のまわりの年の近い友人たちにしても、チェルノブイリ原発事故のことは知っていても、今でも現地で被害が続いていることを知っている人はほとんどいなかった。さらには、「チェルノブイリ」という言葉さえ知らない人もいた（涙）。

これは決してチェルノブイリ原発事故についてのみいえることではないが、どこかで大惨事が起き、世界中の人々がその出来事に目を向けたとしても、時が経てば人々の記憶からその大惨事はうすれてしまう。しかし、チェルノブイリでもそうであるように、人々の記憶から原発事故という大惨事が消えかけていようと、ベラルーシを含めた現地では、今でも被害が続いているのである。

チェルノブイリ原発事故から今年で19年になる。人々のところからますます「チェルノブイリ」がうすれていくなかで、支援活動が続けるということの大変さを、事務局の専属スタッフになって、より理解できるようになった気がする。アルバイト時代は、他のアルバイトをかけた、もちでやっていたり、学校があつたりなどで、あまりチェルノブイリ支援運動・九州の活動（イベントや学習会など）に参加できずにいた。

が、今はチェルノブイリ支援運動・九州の事務局員として、日々の事務的な作業に加えて、イベントにブースを出展して団体の活動を紹介したり、学習会を開催して原発事故やチェルノブイリの今を生きる人々のことを伝えたり・・・と、日々仕事に追われている（気がする）。

そして、ふと考えてみると、世間がチェルノブイリのことを忘れていってしまうなかで、こうやってひとりでも多くの人にチェルノブイリの現状を知ってもらう活動を続けるのは大変だなくと改めて思う。これからもっと仕事に慣れる、もっともつとその大変さを実感できるようになるかもしれないが、その反面、会員の方々のところ温まるメッセージやこのあいだの地震のお見舞いメール・ファックスなどなど、何気ない一言に対して、ここぞとばかりにじーんとくることも多々ある。原発事故の被災者への支援活動をしている私たちが、その私たちをたくさんの方々が支えてくれている。専属のスタッフになって、そのことがよくわかった。

会員のみなさんの気持ちを無駄にしないよう、これからも事務局という裏方の現場で日々がんばっていききたい。そして、ひとりでも多くの人にチェルノブイリのことを知ってもらい、「チェルノブイリ」はまだ終わってないのだということを伝えていきたい。

## ■報告 玄海原発へのプチ・スタディツアー■

# 私たちの生活を支える電力（エネルギー）について、 いっしょに学習してみませんか？



佐賀県玄海原発、唐津での学習会を行いました。そもそも原発とは何か、チェルノブイリにもたらされた被害、そして現在玄海原発で進められているプルサーマル計画と、これから期待されている代替エネルギーについて考えるための企画です。

学習会の簡単な報告と、この場を借りて、学習会にお招きしたお二人の講師を紹介させていただきます。原発やその事故について知り、被災者を支えることも大切、そして同じような被害が繰り返されないように頑張っている人たちがいます。

## ～プチ・スタディツアー行程～

5月28日夜『ベラルーシの紹介と支援活動報告』

講師：吉本美貴（支援運動・九州）

ベラルーシという国と、そこで今なお続く被害、私たちが行う支援活動について報告しました。

5月29日『玄海エネルギーパーク見学』

玄海原発の施設で、原発の模型やパネルなどが展示してあります。原子力を利用してどうやって電気が作られているのかがよくわかりました。

5月29日

『ソーラークッカーの実演代替エネルギーと私たちにできること』

講師：沖智張さん

限りある資源に頼らないエネルギーの利用例として、ソーラークッカー（太陽の熱を集めて調理する装置）を自作し、日々改良を重ねているそう。数種類のソーラークッカーの紹介だけでなく、実際に実演してくれました。この日はあいにく曇りでしたが、ホットコーヒーとゆで（温熱？）たまごができました。

5月29日

『プルサーマル計画に反対する地元議員の立場から』

講師：三浦正之さん

プルサーマル計画、もんじゅ、六ヶ所村をわかりやすく解説してくれました。“危険性”というのは個人の感覚でありアバウトということから、原発やプルサーマルに対して、コスト（経済性）、「将来に押しつける核のゴミの行き場」という面から問題性を主張。そして、市民共同発電所の提案がありました。これは、個人での購入が難しい太陽光パネルを共同出資によって設置し、地域貢献や売電収入による市民事業を行うというモノ。市民共同発電を通じて、環境負荷のより小さい「きれいな電気」を地域で自給するための提案、社会への広がり、国や県、地方自治体への働きかけに取り組んでいるそう。

## 講師紹介



### 沖 智張さん

1966年福岡県生まれ。親の影響で、小さな頃から環境を意識しながら育つ。大学を中退し、1年間ボランティア活動をしてきたときに、“リサイクル”にふ

れる。東京に上京し、築地市場でバイトをしながら、シュタイナーの学習会に入り浸る。福岡に戻ってからは、フリーマーケット、自然エネルギー、オーガニックカフェなど幅広く携わり、現在はソーラークッカーに夢中。まわりの人を元気にするフシギなオーラをお持ちの沖さん。ホームページはコチラ↓

<http://www8.ocn.ne.jp/~rtdtom/feac04/00feac.html>

### 三浦 正之さん

1974年佐賀県生まれ。学生時代は科学、物理学にハマる。卒業後に生活協同組合に勤め、環境や福祉、子育て、食べ物、原発などの問題について知る。

99年の地方統一選挙に関わり、政治と社会、市民運動のつながりについて考え始める。03年、自身が唐津市議選へ出馬することを決意し、当選。05年、合併後の新・唐津市議に再当選。現在は、プルサーマルをとめさせるため、市民共同発電所を実現させるため、奮闘中。議員であり、サーファーであり、一児のパパ。気さくでやさしい、見ためは今どきのおにいさん。三浦さんへのアクセスと、市民共同発電所のお問い合わせはコチラ→ [mmmpost@yahoo.co.jp](mailto:mmmpost@yahoo.co.jp)



# チェルノブイリ支援運動・九州 第15回総会

▼2005年3月20日(日)

ウインドファーム(福岡県遠賀郡水巻町)

## 2004年度活動報告

### 【現地事業】

1. チェルノブイリ支援運動・九州第21次調査団の派遣

【期 間】 2004年8月19日～8月29日

【メンバー】 小山浩一(日田郡中津江村立中津江小学校教諭) 西首延子(元長崎県職員組合女性部長) 矢野宏和(チェルノブイリ支援運動・九州代表) 吉本美貴(チェルノブイリ支援運動・九州事務局) 山田英雄(医療通訳、コーディネーター)、マリーナ・チャイキナ(通訳)

【内 容】 ミンスク、ゴメリ、プレスト、ストーリーリンでの調査、医薬品・医療器具の贈呈、関係者打ち合わせ

【支援物資】 検診用医療器具、医薬品

【支援金】 検診車「雪だるま2号」購入費

【支援先】 ゴメリ州立内分秘診療所、プレスト州立内分秘診療所、ストーリーリン地区中央病院、甲状腺ガンセンター(第一番病院内)、ベラルーシ赤十字

2. ビテフスクにおける検診団、プレストにおける第4回検診団の派遣

【期 間】 2004年10月23日(土)～11月7日(日)

【メンバー】 武市宣雄医師(広島甲状腺クリニック院長) 三本亜希臨床検査技師(広島甲状腺クリニック)、清水一雄医師(日本医科大学医学部第二外科室主任教授)、渡會泰彦臨床検査技師(日本医科大学付属病院病理部)、星正治(広島大学原爆放射線医科学研究所教授) 寺嶋悠(チェルノブイリ支援運動・九州運営委員)、山田英雄(医療通訳、コーディネーター)、マリーナ・チャイキナ(通訳)、賀来佳男(日本医科大学4年生)

【内 容】 ビテフスク市、プレスト市での検診、調査、医薬品、医療器具の贈呈、関係者打ち合わせ、医学シンポジウム

【支援物資】 エコー、顕微鏡、検診用医療器具、ノートパソコン

【支援先】 ビテフスク州立内分秘診療所、甲状腺ガンセンター(第一番病院内)、プレスト州立内分秘診療所、医学再教育センター内分秘教室

### 3. その他

\*被災者と障害者による現地福祉工房「のぞみ21」支援、作品購入

\*母子を支援する現地NGO「コンフィデンス」支援

### 【国内事業】

1. 主催事業(学習会・報告会・イベント)開催

\*チェルノブイリに行ったつもり学習会

第3～7回(第1～2回は2003年度)

第1回 2月21日 ロシア・ベラルーシの歴史

第2回 3月6日 アリーナさんと交流会

第3回 4月3日 原子力発電所とオルタナティブ

第4回 4月21日 放射能被害について

チンスク、イラク劣化ウラン弾まで

第5回 5月15日 ロシアの味をつまみながら

第6回 6月5日 チェルノブイリ後を生きる人々の生活にふれるワークショップ

第7回 6月26日 ベラルーシに行こう!

18年後の今、もとめられている支援とは?

5月3日 チャリティヘアサロン「スネガビーク」

11月28日 調査隊報告会(報告者:小山浩一)

1月30日 調査隊&検診団派遣報告会

2月20日 検診団派遣報告会

(報告者:武市宣雄、三本亜希、星正治、寺嶋悠)

2. 「2004年活動報告集」発行2005年1月27日

2004年に行った国内外での活動や、ベラルーシの人物紹介などをまとめた報告集を発行し、報告会参加者へ配布、関係者・関係団体へ送付した。

3. 講師派遣

6月22日 石峯中学校

10月18日 春日小学校

11月16日 老岐中学校

11月29日 中津江小学校

11月30日 九州国際大学

12月6日 日田市人権情報センター研修会

12月7日 小楠小学校

2月26日 北九州国際交流協会国際ボランティア入門講座

3月5日 ワールドスタディーセンター講座

### 4. PR等

4月12日 大村美容専門学校2年生のクラスにて活動紹介

4月13日 ラジオ出演 (Gnmimi)

4月19日 大村美容専門学校1年生のクラスにて活動紹介

5月21日 ラジオ出演 (Gnmimi)

12月13日 ラジオ出演 (LOVE FM、コロリンインフォメーション)

5. ブース出展、パネル展示、支援コーヒー・民芸品等紹介、販売

5月22日 環境創造舎トークライブにてパネル展示

5月 手島雅弘チェルノブイリ写真展にて子どもの絵展示

8月7、8日 第22回開発教育全国研究会で民芸品等販売

9月19日 ビーグッドカフェでブース出展

9月23日 まちづくりジャンボリーにてパネル展示

10月10日 スロービジネススクール合宿にて民芸品等販売

10月16日 Via Betaに民芸品紹介、卸し

10月16日～17日 コスモまつりにて民芸品紹介、販売

10月16日～24日 国際交流ウィークにてパネル展示

10月23日～24日 地球市民どんたくにてブース出展

11月6日～7日 ハートフルフェスタにてブース出展

11月8日 フリーマーケットにて民芸品紹介、販売(会員)

11月21日 中津江村ふるさと祭りにて民芸品紹介、販売

12月8日～17日 小楠小学校で募金活動、パネル展示

12月14日 オルガンコンサートにて民芸品紹介、販売

1月5日 「ほっとはうす」訪問、交流、民芸品紹介、卸し

1月9日～21日 土夢創舎にてベラルーシ展

2月26日～27日 ピッコラマリーノにて民芸品販売(会員)

6. チェルノブイリ支援コーヒー・紅茶販売

ホームページ、チェルノブイリ通信を通じての通信販売、イベントで販売

7. 現地福祉工房「のぞみ21」作品紹介・販売

ホームページ、通信を通じての通信販売、イベントで販売

8. 「チェルノブイリ通信」発行

「チェルノブイリ通信」を4回発行し、会員ならびに関係者・関係団体へ送付、イベント(5と同様)時に配布

した。

- 第60号 6月18日
- 第61号 9月24日
- 第62号 12月20日
- 第63号 3月4日

### 9. ネットワーク参加

- \* F U N N ( N G O 福岡ネットワーク)
- \* F U K U N E T (福岡国際関係団体連絡会)
- \* K I I N E T (北九州国際交流団体ネットワーク)
- \* チェルノブイリメーリングリスト

### 10. 寄稿

- 4月5日 「技術と人間」
- 1月 「北九州かわら版」
- 国際協力ニュース 数回

### 11. ボランティア、インターン募集、受け入れ

- \* 事務局ボランティア…のべ21名
- \* 通信発送ボランティア…
- 60号 (下二公民館) のべ24名
- 61号 (頃末小) のべ39名
- 62号 (頃末小) のべ27名
- 63号 (頃末小) のべ27名
- \* イベント、キャンペーン等スタッフ…多数
- \* その他 (物品提供など)…多数

## チェルノブイリ支援運動・九州の組織・運営の現状

1. 運営委員会体制、活動について
  - \* 運営委員会を月1回開催し、事案の検討を行う。
  - \* 運営委員会後「運営委員会だより」を関係者へ発送し、状況報告、意見の収集を行う。

### 2. 現在の会員数

2745名 (2005年3月20日現在)

## 2005年度活動計画

### 〔事業〕

#### 1. 第23次調査団派遣

8月に調査団を派遣し、現地調査をするとともに、今

後の検診について関係者らと打ち合わせを行う。帰国後は報告会などを通じて、広く一般の人々に向けての情報発信に努める。

#### 2. ビテフスク第2回検診団、プレスト第5回検診団、支援運動・九州第24次調査団の派遣

10月頃に専門家・スタッフによる検診団を派遣し、検診、調査、医療機器・医薬品提供、医療技術の伝達、医学シンポジウムを行う。また、日本からの医学生を同行し、学習の機会とする。

#### 3. 調査・検診前準備会と調査・検診後報告会

調査団、検診団派遣の前に参加者・運営委員での準備会と、事後に会員・一般むけ報告会を行う。

#### 4. 学習会

一般の人々を対象として行い、ベラルーシや、チェルノブイリに関する理解を深める場とする。

\* マトリョーシカ絵付け会 (6月)

\* ベラルーシ料理会 (7月)

\* その他

#### 5. のぞみ21とのフェアトレード・支援

調査、検診の際に民芸品を購入し、国内で紹介・販売する。

#### 6. 雪だるま2号の活用

検診時だけでなく、患者の移送、ストーリーン地区のフォローなどに役立てる。チェルノブイリ支援を行う日本国内の団体にベラルーシでの交通手段として雪だるま号を活用してもらおう。また、その様子をチェルノブイリ通信やホームページを通じて、「雪だるま2号キャンペーン」協力者へ報告する。

#### 7. イベント

\* チャリティヘアカット (10月)

昨年と同様に、ヘアスタイリストの方たちと協力して、¥950でヘアカットをし、その収益を支援にあてる。普段は活動に参加する機会の少ない人たちも、現状を知ることのできる機会、気軽に貢献できる機会とする。

\* その他

#### 8. 出張勉強会

学校や地域の集まりなどに講師を派遣し、チェルノブ

イリ事故や支援活動、ベラルーシの現状などについて知る機会を提供する。

#### 9. 新しいパネル作成、貸し出し

これまでの写真を整理し、会員さんや活動に関心のある人たちが自分たちでも広く知らせる機会をつくれるように、新しいパネルを作成して貸し出す。

#### 10. チェルノブイリ通信発行 (年4回)

#### 11. チェルノブイリ支援コーヒー販売

#### 12. 活動報告書作成の準備

(2006年4月26日発行予定)

### 〔重点項目〕

- ・ 調査を通じて、これまでの評価と現状把握、今後の支援の方向性についての見極め。
- ・ プレストにおける検診を通じて、ベラルーシ日本両方の若手医療専門家の人材育成、医療環境整備。
- ・ 事故から19年が経過し人々の関心が薄れつつあることを受けて、また2006年(事故から20年)に向けて、報道機関へはたらきかけ、一般に広く情報発信を行えるように努める。
- ・ 他団体、個人との連携。通信、のぞみ21、リュドミラ・チュプチュクへの関わりなどを通して横の繋がりをつくる。
- ・ 新しく活動、運営に関わる人を増やす。ボランティアの機会、学習会、運営委員会等への積極的呼びかけ。魅力的な参加機会づくり。
- ・ バザー、イベント等への出展。民芸品・コーヒー・バツヂの販売、広報。
- ・ ホームページ等インターネットを活用しての情報発信、活動を充実させるための助成金活用。

### 〔運営体制〕

代表 表 矢野宏和

運営委員長 津島朋憲

運営委員 矢野宏和、河上雅夫、山口英文、津島朋憲、寺嶋悠、小野正法、

小山浩一、谷口恵

事務局 吉本美貴、三島さとこ

監事 永津洋之

# たくさんの方の募金を ありがとうございました

（敬称略・順不同）

志村信子 松下京 久保友子 泉の鯉 日本キリスト  
 教団八幡鉄町教会 上原康史 鳥取治代 片岡直樹  
 サトウ矯正歯科クリニック 松里英男 田中えみ子  
 古賀尚子 島田まゆみ 西川博 梶村静江 城山千春  
 古川玲子 深堀ミチ子 河端則子 保坂尚子 上通  
 リメンタルクリニック 倉牧子 中央興業（株） 西  
 レイ 中山たまき 鳥原良子 谷尚子 岩下育男・富  
 美 椿原まり子 鈴木弘子 本田スミ子 庄籠道子  
 神田香織 花田あさの 渡辺真志子 岡野祐子 清藤  
 嘉智子 西成辰雄 隅田三和 永尾和隆・久美子 添  
 田福美 飯岡知子 富樫須弥子 岸川美好 野村幸子  
 医療法人かどもと眼科医院 加登本拡 大野はるみ  
 佐々木孟 大原貞子 原岡ひとみ 白水明代 小宮  
 田鶴子 渡辺絹子 廣石伊津子 財津悠子 松尾満子  
 大淵恵津子 石橋恵美子 原田和代 杉下啓恵 富  
 永和子 中島まゆみ 檜原こひつじ幼稚園基金・代表  
 者 有吉光寛 松本みね子 立石肇 林裕之 太田昌  
 子 坪井千鶴 江口淳子 得能美樹 岩見幸代 藤田  
 はつほ 南邦子 岩川靖子 大島朋子 グリーンコー  
 プ生活協同組合長崎有志一同 峯和子 久保山彬子  
 羽田弘子 須賀富美子 佐藤久美 松下規子 藤井幸  
 子 坂本佳代 橋口日出夫 桜木秩子 花木雄次 皆  
 木道子 安永美紀 高村久美 武田孝子 岩口香織  
 平山拓治 平井勝美 勝連夕子 坂井加陽子 福山知  
 恵子 前田・中西・沖 丸山和成 佐々木郁江 小田  
 久美子 志田美千代 園久美子 本岡眞利子 梶島一

郎 木村紀子 宮脇正 上里恵子 坂下佳代子 東膳  
 和子 山下晶子 森満子 篠満里江 進藤輝幸 野中  
 緑 金山涼子 後藤宇企子 高山幸子 地球と子供の  
 未来を守るネットワーク 大田りか 柳栄翼 立石千  
 絵 佐藤志保路 木下カズ子 稲月道子 秦美千代  
 三木紀代子 榎本みつ枝 岡崎典子 長野和子 三浦  
 真美 徳永和子 横川律子 山本康江 木下久美子  
 田中ゆかり 西村友子 高田有美子 西村智子 田中  
 京子 柴田廣實 原口敏子 岩田みゆき 梶田千絵  
 川辺希和子 西孝子 山口幸子 田代純子 東野直子  
 大町友穂 永井充子 大野由美 志和格子 水車む  
 ら農園 マインド・ネットワーク 菊池順子 山道子  
 大野安則 じゃがいものおうち 広島市授産事業振  
 興センター 前田晶子 澤田和子 英空寺 力丸邦子  
 三本和 筑豊互助会 宮西いづみ グリーンコープ  
 生活協同組合おおいた 阿羅こんしん 浏レディスク  
 リニツク 多田宏美

（2005年2月16日～5月31日までに募金をして下  
 さった方、ならびに、「のぞみ21」民芸品、チエルノ  
 ブイリ支援コーヒー・紅茶の購入を通じて活動を支援  
 して下さいました方です。通信にお名前を紹介すること  
 をご許可いただいた方のみ掲載しています。）

## 募金内訳

30000円コース	565、000円（174件）
50000円コース	286、000円（55件）
100000円コース	240、000円（19件）
「のぞみ21カンパ」	93、035円（36件）
その他カンパ	342、718円（71件）
合計	1、526、753円

（分割払いの方もいるので数字は割り切れません。）

## 募金者からのメッセージ 一部抜粋

●原発の被曝は悔しいですね。皆さんお大事に！●十数  
 年に及ぶ支援活動凄いことです。ご苦労さま。●子供達  
 に幸せが訪れますように。●がんばってください。少し  
 でも応援させて頂きます。●わずかですが、地道な活動  
 に役立てて下さい。●全ての子供達に希望に満ちた毎日  
 を！！●感謝と勇気を持って一歩ずつ。●一日も早く世界  
 に平和が届きます様に。●今年も協力できることを、う  
 れしく思います。●私も同じ甲状腺の病気です。のぞみ  
 21の方の応援ができたと思っています。●遠く日本か  
 らいつも皆さまの幸せをお祈りします。●一人でも多く  
 の子供が、元気になりますように。●マトリョーシカ、  
 かわいかつたです。●ナターリヤちゃんすこやかな成  
 長を祈ってます。●美味しいコーヒー！いつもありがと  
 うございます。●初めて通信をすみずみまで読み知ろ  
 うとしなかつた自分を反省しました。ナターシャさんステ  
 パンさんの生きる姿に感じるところ大です。●大変な中  
 で前向きに頑張っている人達のことを聞いてこちらも元  
 気を出さなくちゃと思います。皆さんが幸せになります  
 ように。●1986年4月26日を忘れないために！●  
 （のぞみGの）刺繍の手のこんだ作品素敵でした。有り難  
 うございました。●皆様が幸せな一生を送られますよう  
 に。●19年目になるとは・・・チエルノブイリを知らな  
 い世代も多いですね。●今、自分にできることか  
 ら・・・一人でも多くの人に心に向けていただけると良  
 いですね。●平和へ！（通信63号の）リユータさんの  
 イラストがとてかわいかったです！今日も新しい朝  
 を迎えられることに感謝して・・・●世界中の誰もが  
 「生まれてきてしあわせ。」と思える地球にしなければ。  
 ●テレビで日本の医師が献身的に診察していらつしや  
 るのを見、未だに病に苦しんでいる方々がいらつしやる  
 のを知りました。